

# 成田重行 流 地域開発の 戦略学 8

## 危機は好機 ① 岐阜県飛騨市

成田重行さんが岐阜県飛騨市の観光や特産品の開発に携わったのは20年近く前。きっかけは地元の大産業であるスキー場の衰退である。「環境の変化こそ動き出す好機」と主張する成田さんは、地域の有志とともにスキー場とは逆の発想で新たな誘客産業を興していくことになった。

文・写真／窪田新之助

奥飛騨にある飛騨市神岡町へは東京から公共交通機関で訪ねると6時間前後を要する。名古屋駅でJR東海高山本線に乗り換えて北上し、高山駅で降車してからはバスでさらに1時間近くかけて山を越えていく。そんな山間にある町だが、古くから時代の新しい風に触れてきた。

現代においては東京大学の小柴昌俊名誉教授や梶田隆章教授というノーベル物理学賞の受賞者を輩出した町として有名だ。二人が素粒子ニュートリノを観測してきたカミオカンデは、最新鋭の装置での実験開始が2025年に予定されており、ますます科学界における注目度は高まるばかりである。

小柴名誉教授がカミオカンデの施工を計画するにあたり神岡町を選んだのは、この地の岩盤がコンクリートの5倍ほどの硬さを持つという「飛騨片麻岩」で覆われ、ニュートリ

ノを観測地として地下空間が安定していたからだ。加えてこの岩石には亜鉛や鉛、銀が含まれる。そのため、ノーベル賞で脚光を浴びる以前の神岡町といえば、2001年に閉山されるまで東洋一とうたわれるほどの規模を誇った鉱山の町だった。

当時を知る地元の人に話を聞くと、そのころの神岡町はそれこそ大都市に並び立つほどにぎわったそう。東京・銀座のショーウィンドーで人目を引く服飾がこの山峡にも当たり前前に売られている。あるいは新作映画は東京より早く封切られる。そうした栄華の名残は、たとえばかつての遊郭街に立つ待合茶屋跡や料亭跡に見られる。

### 湧水の地で育まれてきた 水屋の生活文化

成田さんと4月終わりに取材で訪れた翌朝、地元在住の茂利昌彦さん

の案内でそんな街中を歩いてみた。茂利さんは創業200年近くになるという茂利旅館の経営者。御年8歳を超える御仁は「飛騨市観光協会理事」「神岡街歩きガイド会員」「高原映観光案内人」といった肩書を持つ、神岡町の案内役にはこれ以上ないほどぜいたくな人物である。

ゆつたりと歩くうちに、何より印象に残るのは路肩の幅広い水路や川の流れ。「ドオードオー」と鳴り響く水音がどこまでも付いてくる。周囲に迫っている山は峡谷を走る高原川にまで一気に駆け下りてくる。そのV字型の谷底に集落が細々とあるため、そこを流れる水の量や勢いもそれなりである。

一方で、山に降り注いだ水は地層を抜けて深く染み込み、どれだけの年月を経てか、街のあちこちから湧き出している。だから街中には「水屋」と呼ばれる、湧水が出る共同小

### ■プロフィール

成田重行（なりた しげゆき）  
1942年生まれ。70年立石電機（現オムロン）入社。91年同社常務取締役、2001年ナルコーポレーション代表。地域プロデューサーとして、全国30カ所の市町村で地域の活性化を支援してきた。05～09年スローフードジャパン副会長、2000年中国国際茶文化研究会名誉理事。多摩大学、立教大学、東北福祉大学などで講師・教授を務めた経歴もある。



屋が点在している。

いずれの水屋もおおむね湧水が3段階で流れ落ちる仕組み。茂利さんによれば、最上段では野菜や果物、中段では食器、最下段で下着などを洗うという。

夏になれば、こうした水屋ではトマトやキュウリを冷やす人が多くなる。茂利さんの話では、それらはかつて地元の子どものおやつだった。



峡谷にある飛騨市神岡町



茂利さんの案内で歩いた神岡町の街中にある遊郭の跡地

子どもたちは高原川でひとしきり遊んだ後、小腹が空いたら水屋に行つて、誰のかわからないのに、それらを好きに取ってはほおばつていた。それでも野菜の持ち主は怒らな

いのが当たり前だった。水屋は子どもたちが学校の行き帰りにのどを潤す場所でもある。「水屋によって水の味が違うんです」と茂利さん。訪れたそれぞれの水屋で味わってみると、

確かに説明のおとり。湧水地によって水脈が違っているためだ。

かつて、こうした水屋はあくまでも生活空間のひとつだった。先ほど紹介したような洗い場に加え、そこに集まる住民たちの交流場だった。

それがいまでは外に開かれ、神岡町のウォーキングコースになっていく。茂利さんの道案内で私たちがたどったのはその一部である。まさしくこれを仕掛けた人物こそ成田重行さんなのだ。

### スキー客減少の危機をどう乗り越えるか

成田さんが飛騨市に合併される前の神岡町とかかわりを持つようになったのは18年前。当時の船坂勝美町長から依頼され、迫りくる危機を乗り越える方策を求められた。

これまで連載で繰り返し述べてきたように、成田さんが地域開発をすすめるにあたり大事にしていることに「大義」と「必然性」がある。この両方が出現しないと物事はうまく動き出していきな

い。では、神岡町にとっての大義と必然性とはなんだったかといえは「スキー人口の減少」だ。

このころ、東海地方最大の「ひだ流業スキー場」が全国的なスキーブームの陰りでみる



水量が豊富な神岡町では各家庭でも湧水が取れるようになっている

みる客足が鈍化していたのだ。それとともに最盛期には70軒あったスキー場周辺の宿泊施設は20軒にまで減少。残った20軒も、経営を続けるかどうか迷っているような有様だった。

こうした宿泊施設はスキー場あつての商売である。スキー場が営業期間である12月から翌年2月までに一気に稼ぎ、そのほかの期間は閑散としている。成田さんは本来にこうした産業のあり方は地域には合わないという。

「なぜかというとき、ピークのときは地域のキャパシティを超えてしまっているんですね。そうした商売は収益率があまり良くない。とにかくピーク時に合わせて雇う人も増やさな

ければならないので、それだけ経費もかかるわけです」

## 観光客が途絶えない 仕掛けをつくる

成田さんが神岡町再生に向けてとった行動はそれとはまったく逆のこと。つまり一年を通して、さほど多くはないにせよ、観光客が途絶えない仕掛けを築いていく道である。

そこで思いついたのはスキー場とその周辺にウォーキングコースを設備することだ。なぜウォーキングコースかといえば、1990年代に健康志向の高まりからウォーキングブームが起きていたからだ。これは、成田さんが地域を開発するにあたって不可欠の条件として三本柱のひとつ「時代性」である。

とはいえ単なるウォーキングコースでは面白くない。ありきたりのものであれば、いざれ観光客にそっぽを向かれてしまう。代わりに成田さんは地域の住民とともにコースづくりに着手することにした。

## 住民の特技を活かしたウォーキングコース

そこで集めたのは、ある種の特技や地域づくりに関心を持っている人たち。特技というのは鳥や花、虫に詳しいといったものだ。ある人は鳥

のさえずりを聴いただけでその名前を言い当てるし、ある人は花のありかに精通している。そうした地域に隠れていた名人たちに、どういうルートをとれば、鳥のさえずりを聴いたり花を観賞したりできるかを尋ねた。

それと同時にスキー場とその周辺を歩いてみた。そのなかで気づいたのは、たとえばある高齢の女性は鎌で刈り取った草を束ねて、畦道に等間隔で置くのを恒例としているといったこと。この風景は地元では見慣れたものだが、都会の人たちにとってみれば面白かったり美しかったりするかもしれない。だから成田さんはその畦道もルートに組み入れるように町役場の担当者に勧めた。

## 埋もれていた資源が 経済を生み出した

成田さんがルートづくりのために行なったそうした取材は、結果的に地域の人たちにとっては自分たちの足元を見つめなおすきっかけになったそう。当時、神岡町交流産業課長として携わった中田秀夫さん(65)は振り返る。

「それまではなんでもない町だったけど、みんな成田先生から話を聞いているうちに、いい町なんだと思ひ直しました」

成田さんは船坂町長や中田さんらと道路に座り込んで、地図を見ながら、名人の意見を参考にしてルートをつくっていった。

この企画は見事にヒットした。土日ともなれば1回当たりバスが30台やってきたという。もちろん当初の狙いだった年間通して観光客が絶えないということも実現できた。この「飛騨流葉カントリウォーク」が完成して2年目には、一般社団法人日本ウォーキング協会の推奨コースにも組み入れられ、より一層全国に神岡町の名が知られるようになった。

このヒットを機に、冒頭に紹介した水屋をめぐる「船津の街タウンウォーク」や「夏山冬里のんびりウォーク」といった別のコースもつくっていった。各集落はガイド役を配置し、ウォーキングの観光客に見どころを案内することになった。

肝心なのは、一連のウォーキングコースをめぐる事業はすべて経済性を前提にしていることである。つま



成田さんと語る飛騨市の船坂元町長

り、観光収入の見込みをベースに、ガイド役はその対価を支払える仕組みにしたのだ。住民たちがまったく気づいていなかった、あるいは価値を感じていなかった地域の資源が経済を生み出したのである。

## 自らかかわっているから 愛着もわく

観光客の増加がもたらすものは経済効果だけではない。自ら積極的に地域開発に携わる人たちにとってみ

## 危機は好機①



スキー場の周辺を利用したウォーキングコース



町の各所に点在する水屋。いまではウォーキングコースの一部にもなっている

れば、新しい風が吹くことは心の窓を大きく開くものである。

たとえば地域にいる名人たちの上を行く強者が都会からやってきて、花や鳥、虫についてより深い知識を教えてくれる。そうなると名人たち

は図書館に通い、強者に教わった情報を再確認しながら、ガイド役としての技量を磨いていくのである。「みんな普通の人でしたけど、成田先生や都会の人たちに磨きをかけられた感じがすね」と中田さん。

今回神岡町を訪れた際、ひととき目を引かれたのはこうしたコースの脇や畦際にある花々であ

る。辺りの新緑に美しく映える芝桜からは、その手入れをしている人たちの柔らかな心が伝わってくる。

私は取材で全国を回るなか、町の雰囲気というのはその土地の人の心を表しているのだと認識するようになった。そういう意味で神岡町は当初思っていた雰囲気とは違っていた。炭鉱のイメージが強いから、どうしても荒々しい町を想像していたが、むしろ人の心に穏やかさを感じた。

町のあちこちに咲く花々の多くはカントリーウォークが始まってから住民たちが有志で植えていったものである。観光客に歩くことをもって楽しんでもらいたいという配慮から

だ。交流は人の心を開く。神岡町のウォーキングコースはほどなく「日本ウォーキング協会の歩道100選」に選ばれるまでに成長した。

地域におけるこうした変化は、カネにモノを言わせて第三者に委託してウォーキングコースを設備してしまえば、まずもって起こりえない現象である。なぜなら、人は自ら積極的にいかかわっていないものに愛着を持たない。

改めていえば、「成田重行」地域開発の哲学の根幹にあるのは「大とは異なる小の価値の追求」である。小の価値を創造するのはプロセスだ。それはたとえば花や鳥、虫の達人たちが都会の強者に触発されて、さらに勉強を重ねるということである。あるいはウォーキングコースに花を植え、それを絶やさない普段の手入れである。プロセスのなかで住民は課題を自ら抱え、それを超えていく力を持つに至る。

その証左は、成田さんの手を離れてから10年以上が経った現在でも、地域開発に参加した住民たちが当時教わったことを、私との会話のなかで時々口にしていただことだ。成田さんから学んだ言葉を胸中にいつも持っていたのだろう。それは地域開発の歩みが彼ら個々のなかではいまだに続いていることでもある。